
病室の少女と死を運ぶ少年

時光 火流那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病室の少女と死を運ぶ少年

【Nコード】

N0077S

【作者名】

時光 火流那

【あらすじ】

生と死が交じり合う空間である病院。

その一室でベッドに寝転がる難病の少女、千夏の前に突如現れた少年の正体は死神で…。

少女と死神の運命が交差し、少女の生き方が変化する。

死神シリーズ第二弾

コメントしてくださると作者は泣いて喜びます。

プロローグ

side：千夏

千夏は病室から外を見ている、千夏は病気で外に出たくても出られないから。

昨日、先生とお父さん、お母さんが病室に来た。その話を思い出しながら、外を見る。

「手術をしなければ、千夏ちゃんの余命は長くありません」

先生は苦い顔をして言っていた。

「そんな……」

絶望した顔をするお母さん。

「先生！その手術は」

お父さんが先生に聞いた。

「とても難しい手術です、成功率は15%以下です……」

15%以下……6回中5回は失敗するのなあ、なんて他人事みたい
に考えてしまった。

「それでは「もちろん、我々もベストを尽くします。我々を信じて
ください。」「……よろしく……お願いします」

お父さんとお母さんは頭を下げていた。

そんな事が昨日のお昼にあった。

それで、今日手術の日にちが決まった。

それは千夏の12回目の誕生日。

あと今日を入れても5日しかない。

それとも5日もある？

どっちだろう？

なんて現実逃避をしても日はたっってしまうし……。

今までは日が経つのが遅かったのに、いざこつなると一日一日が早く感じてしまう。

此処から見える光景ともお別れかもしれない。相変わらずのきれいな青空。

あれ？広場にいつもは居ない人がいる。

あの黒い服を着た人は誰？

side:千夏 Fin

プロローグ（後書き）

皆さんお久しぶり、最近ユーザーネームが長くて短くしようか悩んでいる藤國火流那です。

というわけで、死神シリーズ第二弾プロローグです。

おかしな箇所があれば連絡をください、またコメントはいつでも受け付けています。

下見は大事（前書き）

これで今書けているのは最後です。
なるべく早く書きます、待っていてください。

下見は大事

side：死神

俺は病院の前の広場に立っている。

いや、存在していると言った方がいいかもしれない。

俺の前に建っている「市立星ヶ丘^{ほしがおか}総合病院」は「新都市開発計画」の為に建設された建物らしい。

市街地がやっと整備されてきたが、公園などの施設がまだ出来て無
いから、

見舞いついでにここの前にあるリハビリ用の広場を憩^{いじ}いの場として
利用する住民は多いらしい。

ざっと見たとしてもかなりの人が居るが、俺の姿を見る事が出来る
奴は少ししかないだろう。

死神^俺が見えるのは、俺と同じ死神か、死に瀕している者、もしくは
死が迫る者だけだ。

俺は次に狩る人間の確認のために指令帳^{リゼッタ}を開いた。

結構便利なんだよな、これ。

簡易プロフィールも載^{ペー}つてるし……。
などと考えながら頁^{めく}を捲る。

あった、次に狩る人の名前は「篝火千夏^{かがりび ちか}」、年齢11歳、性別女

期限は明日の10月10日になっている。

とりあえず下見にぐらい行つとくか……。病院つてのは意外と迷路みたいになつてるしな。

指令帳に書いてある病室の前に来たわけだが、中から話し声がある。少し待つか……。

辺りを見渡すとこの階層は全部個室らしい……。個室つて四人部屋とか六人部屋よりも金かかるんだよね、なんて考えていると扉ドアが開いた。

よかった。その気になれば壁抜けも出来るが、それをやると後々めんどくさいからな。

看護師らしい人が出て行くのに乗ウチじて病室内に入った、直後。

「あなた、誰？」

side:死神 Fin

下見は大事（後書き）

ヒロイン登場！！

どうも違う作品の武器名が決まらずかなりテンションがおかしくなっている藤國火流那です。

次は人物紹介になるかな、そうしたいです。

登場人物紹介的なもの、その一（前書き）

テンションが壊れてます、気にせず読んでください。

登場人物紹介的なもの、その一

時光火流那「というわけで人物紹介です、いえ〜い！」

死神「めんどくさくテンションを上げんな！」

時「いや〜すまんすまん、何せ初めての事だからよ〜」

死「おもつきり素の部分がでてるな…」

時「ごたごた言っても始まんないので先に進めましょう。」

死「ごたごた言ってるのはお前だ！」

時「第一弾のココロも此処でいきます、
まずは主人公から、どぞ！」

・名前……死神（本名不明）

・歳 ……設定年齢17歳

・誕生日…十月四日

・性別……男

・役割……主人公

・所属……ダークル・スライム・カールピオ魔界の死神組織

- ・身長…… 169,4cm
- ・性格…… 面倒見が良い、仲間思い
- ・一人称…… 俺おれ
- ・髪の色…… 黒
- ・髪型…… 短髪より少し長いぐらい
- ・目の色…… 黒
- ・装備…… シユバルアウロ死神のローブ、鎌の代わりの大剣、種類はクレイモアみたいなもの、クルツツレーチエアンダースーツ（下着ではない、シャツみたいなものとズボン）
- ・趣味…… 新しい魔術 & amp ; 技の開発、読書
- ・特技…… 家事全般
- ・大事…… 仲間、現在の家族、大剣
- ・苦手…… 報告書作り
- ・好きな物…… 月、林檎
- ・嫌いな物…… 仲間をぞんざいに扱う奴

・モデル…作者の理想像

紅^{くれない}ココロ「設定年齢って何ですか？」

死「ココロいつの間に……俺も気になってたけどよ、それ以前にモデルなんだよ！『作者の〜』って！」

時「一つずつ答えていこう、年齢は人として年を換算した年齢だ、実年齢は秘密だ。」

死「何か伏線^{ふくせん}のニオイがするんだが……」

時「だってそつだもん。」

コ「認めるんですか!？」

時「悪いかー、つーかよー理想像だから俺より身長高いのはいいにしてよー、もてやがっていつペンもげる!ー!」

死「話を書いている奴に言われたくねえよ!」

コ「まあまあ、抑えるですよ。それよりなぜ名前が本名不明になっ
てるんですか?」

遠き「まだ二弾には出てこないからだ、出んのは第三弾だな。」

コ「そうなんですか?」

時「もつとも“今”の呼び名だけだな、本名は今の所は出てこない。」

死「また伏線張りやがって……」

時「くくく、主人公にはひたすら不幸な目に会ってもらっからな、覚悟しとけ。」

死「この野郎。」

コ「諦めるべきですよ。」

時「ココロの言うとおりだ、そういう主義で進んだからな。次に行くぞ。」

・名前……紅 ココロ

・歳 ……1?歳

・誕生日…九月五日

・性別……女

・役割……このシリーズにおけるメインヒロイン

・所属……魔界の死神組織

・身長……141cm（ヒール装着時146cm）

- ・性格……御淑やか、どちらかといえば自分より他人を優先する
 - ・一人称……私わたし
 - ・髪の色……オレンジの様な茶色
 - ・髪型……不揃いな短髪
 - ・目の色……明るめの茶色
 - ・装備……死神のローブ、死神の鎌シユバルレツダ、アンダースイツ、鎖のついたチョーカー
 - ・趣味……書類整理
 - ・特技……書類の早書き、鎌の扱い方
 - ・大事……チョーカー、鎌、思い出
 - ・苦手……特になし
 - ・好きな物……林檎
 - ・嫌いな物……自分勝手な人、思い出を平気で踏み躪むじる人
 - ・モデル……イメージとしては某魔法少女の八神さん（A・S時）
- 追記、胸のふくらみは乏しい

コ「追記はいらんです!!」

時「あ、ついでに言うとお前の『』です』口調は某薔薇乙女の第三人形からだ。」

コ「そつちを追記に入れるべきです!!」

死「どうどう、落ち着けて。」

コ「止めるなです、もう色々突っ込むですよ、1?歳って何ですか!、

モデルが無くイメージだけなのは!

はい、答えて!!」

時「何かキャラ崩れて来たな……、まあいいか。まず1?歳は第三弾で答えを出す。」

モデルが無くイメージだけなのは、俺の小説に出てくるほぼ全部の女性陣に俺の理想とする女性像を入れたからだ、お前には『あらゆる面において尽くしてくれる』っていつのをいれた、簡単に言えば古き良き時代の日本の妻ってところか。」

コ「前時代的です。」

死「そんなバツサリ言ってやるなよ。」

時「あと、“鎖のついたチョコレート”は第三弾で出てくる。」

死「お前：この話だけでいくつ伏線入れてんだ：

ん、篝火千夏がねーけどいいのか？」

時「題名を見てみる。」

死& amp ;コ「え？」

時「登場人物的なもの、“その一”って書いてあるだろ。」

死「次もあんのかよ！」

コ「次もあるんですか！」

時「千夏が完全に登場した後と最終話の後に入れる予定だな。

あ、ココロこれ読んで。」つメモ

コ「なんです？ええつと『この話においてのキャラは八割がノリで書かれており実際のキャラとは違います』って当たり前です！」

登場人物紹介的なもの、その一（後書き）

ギャグを入れつつ紹介でした。

またお願いします。

女の子は小悪魔になる時がある(前書き)

ゴールデン・ウィークなので時間が在り余ったので書きました。

女の子は小悪魔になる時がある

side：死神

「あなた誰？」

まっすぐに揺るぎ無く俺を見つめて言う「篝火千夏」に何て答えておこつか、まあやはり。

「君に死を与えに来た者つてところか。」

湾曲表現わんきょくかもしれないが、あながち間違いじゃないだろう。俺は千夏のベッドに近づきながら言った。

「じゃあ、千夏はもうすぐ死んじゃうの？」

臆おくすることなく聞いてきた。

「ああ、君はもうすぐ短い生涯を終える」

少しはぐらかしたが真実を突き付けた。正確に言えば死ぬのは明日だがな。

「よかった。」

「……はあ？」

何を言ってるんだらう？

この子は。

「だって、もう痛い思いをしなくていいんでしょ？」

「まあ、そうなるな。」

「それに……」

表情を曇らせ言った。

「もうお父さんと母さんに迷惑を掛けなくていいし……」

本音はこっちか…

自分の事よりも両親の事を考え気に掛けるとはな、
今時の十一歳いまだきつてのは考え方が大人だ。

だが、以前の俺おを見ているようで少しいらつく。
いわゆる同族嫌悪どうぞくけんおって奴なのか？
多分違うと思うが。

「それでお兄ちゃん」

「何だ？」

さっきの表情が嘘の様な顔で

「お名前は何ていうの？」

唐突にもほどがある質問をされた。

「ええっと、千夏って呼んでもいいか？」

「うん、別にいいよ。」

むしろ千夏ちゃんって呼んでくれると嬉しいけど?」

「いや……後者は遠慮しとく。」

割とマジで遠慮した。

少し千夏がふくれてるような気がするが無視だな。

気を取り直していこう。

「ん、じゃあ千夏、お前は自分を殺しに来る死神の名前を聞いて意味があるのかよ?」

「意味?そんなの無いよ、ただ知りたいだけ。」

もっともらしい答えが返ってきたな、『ただ知りたいだけ』か……一番性質が悪いな。

あいつから『名前は極力喋るな』って言われてるし。

「悪いな、名前は教えられない。」

「え〜、けち〜。」

口を尖らせて抗議する千夏、せつかくの可愛い顔が台無しだな。

「けちで悪かったな。」

悪びれず言っちゃった。

「ん〜、じゃあさ、死神のお兄ちゃんだから『しい兄』って呼んでいいよね?」

「なんでそうなるんだ？」
「なんかすごい事言われたぞ！」
「だって、名前は言えないんでしょ？」
「つまり好きなように呼べって意味があるよね。」
「間違ってるの？」

……小悪魔がいる、此処に小悪魔がいるぞ！
どうすんの、俺！
思案時間約0、5秒の結果。
諦めるか……。

「勝手にしてくれ……」

瞬間、千夏表情はにんまりとした笑顔に変わった。

side:死神 Fin

女の子は小悪魔になる時がある（後書き）

千夏のキャラがなんか変わりましたが気にしない。

久々投稿の時光火流那です。

今日は中学時代の親友に会ってその場のノリで書いたらこんなものになりました。

ノリって大切ですねえ。

俺と千夏と病室にて（前書き）

テスト期間中だが投稿してても大丈夫か？

大丈夫じゃない、大問題だ。

でも掲載しちゃう俺。

俺と千夏と病室にて

side:死神

「しい兄」と言う呼び名が（俺の譲歩によって）決定した後は、千夏の小悪魔度（俺が勝手に定めた）もそこまで上昇せず他愛のない話に流れた。

「しい兄はどんな食べ物が好きなの？」

「俺は魚系が好きだが」

人間だった頃だがな。

「え、お魚って生臭くない？」

いきなり否定するか。

「きちんと処理すれば臭くないぞ」

「……ここのご飯のお魚はかなりまずいよ」

「……それは俺に言われても困るんだが」

俺にどうしろというんだ？

食事係の人たちに抗議でもすればいいのかよ。

「千夏は果物が好きだよ」

「そうかい」

「そんなことは置いといて、嫌いな食べ物は何？」

「話を思いつきりずらすなよ」

「嫌いな食べ物は？」

都合の悪い言葉は聞こえない耳を持つてるんだな。
まあ、いいけどよ。

「茄子とか梅干しとかみたいの歯ごたえがクニヤってなるやつ」

「意外と不特定なんだね」

「そう言うお前はどうかだよ？」

「千夏はお魚と野菜かな」

「俺より明らかに多いだろ」

「あ、でも野菜でも食べられるやつもあるよ」

「それでもだよ」

「アー、アー聞こえない、聞こえないよ」

怒るべきか？

注意して聞く様なやつじゃないしな、言うだけ無駄か。

「お誕生日はいつなの？」

何の脈絡もない話題が出て来たな。
答えるけどまずは

「なぜそれを聞きたいんだ？」

理由が聞きたい。

「え？なぜって、千夏のお誕生日が今日を入れて五日後だからだけ
ど」

それを迎えることなく一生を終えるがな。
表情に出さない様にして言った。

「十月の四日だ」

千夏が眉をしかめた。
なんだ。

すごく嫌な予感がする……

「ホントにいい兄ってタイミング悪いねー！」

なぜか千夏に怒られている俺。

「なんでお前が怒るんだよ」

俺達しにがみはもともと日付感覚が疎うとい。

俺はその日狩る対象を一日中追跡していて、本部に帰ったのは深夜を回っていた。

さらに言えばその日はココロとは別行動だった。
これが千夏にはさらに重要な点ポイントだったらしい。

「しい兄、お誕生日は一年に一回しか来ないんだよ!!」

「いや……そんなもん分かってるぞ……」

「分かってるのならお祝いしてもらおうよ。」

千夏はね、お誕生日がすごく楽しみなんだよ、意味が分かる？」

「一年生きられたって事とまた一年頑張って生きようと思えるからか？」

率直そつちちやくに言っいてやった。

大方理由なんてこんなもんだろう。

「50点だよ」

驚愕。俺にとっては100点の答えを否定されてしまった。

今は人では無いとはいえ元人間の俺の考えを一刀両断されるとはな。

しかし、50点が、自信満々だったのにな……感覚の違いなのか？

俺と千夏には見た目としては6歳、

精神的には10歳以上の差があるのに、残りの50点が分からない。

釈然じやくぜんとしないがここは本人に答え聞くか。

「なあ千夏、残りの50点って何だ？」

「ひ・み・つ」

見ている気持ちいいほどの満面の笑みだ。
だが、俺にとって怒りしか生まなかった。

……このガキ殴ってやるうか？

……いや、抑える俺、冷静沈着を目指しているんだろ。
それに今殴ったらさっきまでしてきた事が全部台無しだ。

「なんで秘密なんだよ？」

「ふふーん、女の子は一つぐらい秘密があった方が魅力的だからだよ。」

そんな理由かよ……

もうちょっとまともな理由があるのかと思ったのに。

「そんなじゃないよ、千夏にはすっつっく重要なのー！！！」

声に出していたらしいな。

っーか千夏。

病人がベッドの上で身振り手振りを入れたオーバーアクションをつけて叫ぶな。

そう思ったが声には出さないでおく。

エスカレートさせる
火に油を注ぐだけだからな。

「そうゆうわけで、しい兄には教えられませうん、残念でした。」
うつすら殺意がわく。

この場で狩ってやろうか。
が、我慢だ、我慢。

「この小悪魔が」

この程度に抑えた俺をほめて欲しい。

「知ってる？しい兄。」

今の時代は少しくらい小悪魔の方がモテるんだよ？」

千夏はさも自信ありげに答えた。

皮肉だという事に気づいてないみたいだな。

しかし、自分が小悪魔系だという事に自覚があつたんだな。

「知るか」

そっけなく返した俺。

だが、内心は自分の知り合いの女子の情報を高速で検索していた。
データ

……千夏よ、俺の知ってる女子で小悪魔はお前だけだよ。
多分……。

side：死神 F i n

俺と千夏と病室にて（後書き）

ホントはもっと長くなる予定だったんですが、
詰まりすぎたので切りました。

10/2 前編と後編を結合して一話にしました

懐かしさは突如こみ上げてくる(前書き)

前話に手間取っていたんです…

続きは出来てました。

懐かしさは突如こみ上げてくる

side：死神

「さて、そろそろ帰るか」

さすがに長居し過ぎた。

巡回の時間のようだ。

足音が近づいて来ている。

「……………行っちゃうの？」

「明日また来るからもう勘弁してくれ」

魂を狩りにな。

しかし、この2時間の間に俺はどれだけ精神力を削られたんだ…

…？

「ふーん……………暇なんだね」

「……………来んのやめようかな……………」

わざと聞こえる程度の声で言った。

「え……………嘘です、冗談だから明日も来てください！」

ものすごく取り乱す千夏。

くくく、初めてこいつに勝った気がするな。

「冗談だよ」

俺は微笑み千夏の頭を少し強引に撫でながら言った。

「そつだよね、しい兄は嘘はつかないもんね」

相変わらず喜怒哀楽の激しい奴だ、この2時間の中でどれだけ表情が変わった事か…。

つか、俺が嘘をつかないって自信が何処から来るんだよ。

……まあいいか。

俺は千夏のベッドから離れ、後ろ手に手を振りながら言った。

「じゃあな千夏、また明日。」

「じゃあね、しい兄」

俺は千夏の声を聞きながら身体を透明化し、

千夏の病室の扉が開くまで待ち、開いたのを見はからって病室を後にした。

10月10日、今日千夏は死ぬ。

俺が狩るからだ。

今日までの1ヶ月間幾度となく繰り返してきた事だ、今更迷いも躊躇もない。

だが、一つ気になる事がある。

いつもなら死因の欄に事故死や出血死といった具合に書いてあるのだが、

千夏のは空欄で何も書いてなかった。

つまり、千夏の行動によって死因が変わるという事だ。

昨日結構話したが、今日千夏がどういう行動をとるか結局よくわからなかった。

そもそもあの小悪魔がどんな考えで動いているかを男の俺が理解できるわけがない。

今思えば厄介な仕事が回ってきたかもしれないな。

だが、千夏と話をしていたあのとき、俺は「人間」だったところを思い出せた。

主観的には二年から三年弱の太く短い旅の日々。

その中で数え切れないほどの物を得て失った。

そんな旅の日々を過ごしていた俺にとって、その時間はとても貴重だ。

千夏との会話で、俺は短い間だったが「人」として必要なものを取り戻した。

そんな気がする。

s
i
d
e
:
死
神

F
i
n

懐かしさは突如こみ上げてくる（後書き）

珍しく一か月以内の投稿です。

部活ですごい無茶ぶりをされたものでして…

夏休み中に一作品仕上げて提出とかwww

登場人物紹介的なもの、その二

時光火流那「千夏の完全登場を祝して第二弾だ!!!」

死神「このテンションは当分戻らないな」

紅ココロ「なぜです?」

死「夏休みが始まる直前だからだと」

時「楽しみなんだが、宿題とロボコンと文芸部で休みがねえんだよ
おおおお」

コ「自業自得では?」

死「ココロ、こういう奴に冷静な突っ込みは無駄だ。
無視して進めるのが得策」

コ「そういうもんですか?」

死「そういうもんだ。」

つーわけで、今作のヒロインの紹介だ」

・名前……かがりびちか 篝火千夏

・歳 …… 11歳

- ・誕生日…十月十四日
- ・性別…女
- ・役割…ヒロイン
- ・現在の住所…あえて言うなら市立星ヶ丘病院、三階の個室
- ・身長…137cm
- ・性格…揚げ足取りだが根は素直、小悪魔
- ・一人称…千夏
- ・髪の色…黒
- ・髪型…肩甲骨あたりまであるストレートのロング
- ・目の色…黒
- ・装備…病院服
- ・趣味…読書
- ・特技…特になし
- ・大事…家族
- ・苦手…苦い薬、痛いこと

- ・好きな物……夕焼け空、しい兄
- ・嫌いな物……病院食（まずいから）、野菜全般
- ・モデル……某伊勢の半月物語の病弱少女
- ・理想……少し生意気な小悪魔

時「ふう〜やつとテンションが戻ってきたぜ」

死「それは良かったな、しかし意外と普通なんだな」

時「へんてこ設定にならないように努力したからな」

コ「私たちの設定はへんてこ!？」

時「ああ、十分の三ぐらい」

死「多い……のか？」

時「まあ、へんてこ〓伏線みたいなもんなんだがな」

死「おい！」

それでもいいのか!？」

時「いいんだよ！」

このシリーズは今のところネタだけで6個あるんだからな」

コ&mp;死「……………」

?「しい兄~~~~~」

ゴス

死「ゴフツ」

篝火千夏「しい兄！なんか身体の調子が良いんだけど！どうしてか分かる？分かるよね！教えて！」

時&mp;コ「うわぁ…鳩尾に頭が綺麗に入った（です）」

千「へ？」

うわ、しい兄大丈夫！誰がこんなことを！」

ギユツ さらに力強く千夏が死神に抱きつく音

ビキ！ ココロのこめかみに青筋が浮かぶ音

時「いや、お前のせいじゃね？」

コ「それより早く離れるです」

千「うう〜」

死「……………」

時「おい、無事か？生きてるよな」

死「ハツ…………遠くに郁織ふみおりと大きな川が見えたぞ」

時「蘇生乙、そしてお前もいい具合に番外編という毒に侵されてきた」

コ「メタ発言です」

千「ごめんなさい……」

コ「謝っててすむ問題じゃないです、実際彼は死にかけたんですからね！」

千「それに関しては反省してるけど、それはそうとお姉さん誰？」

コ「あなたに『お姉さん』と呼ばれる筋合いはないです、私には『紅ココロ』という名前があるんです」

千「くれない、こころ？」

じゃあ、ココ姉ねえで

コ「お姉さんよりは……」

千「で、ココ姉はしい兄の何なの？」

コ「……彼の同僚兼先輩です」

時「年は下なのに「黙ってるです!!」……すまん」

千「ふぐん、じゃあ千夏よりも関係薄いんじゃない？」

コ「な！」

一緒にいる時間なら私の方が長いです!!」

千「関係は長さじゃなくて密度だよ」

コ「なんですか？

ちよくと生意気ですよ？年上は敬うものです」

千「じゃあ、ココ姉もしい兄を敬ないといけないよ？
敬ってる？」

コ&千「……………」

バチバチバチ 互たがいいにらみ合い火花が散る音

ガクガクブルブル 男二人が肩を寄せ合い振るえる音

時「…………何この修羅場……？」

死「どうしてこうなった……………」

コ「もともとは」

千「なに？」

時「收拾が着かん、これにて終了だ!!」

死「この話が番外編だけであってほしいな結構マジで……………」

千「しい兄!この人生意気!!!!」

コ「あなたには言われたくないです！」

死「こっちに振らないでくれ！」

時「仁義なき戦い、いや犬猿の仲か」

登場人物紹介的なもの、その二（後書き）

はい今回も作者大暴走でした

次の紹介的なものは完結後を予定してます。

それにしても死神君が本格的にリア充化してきた…

決断すれば・・・(前書き)

まさかの一日二回更新

決断すれば・・・

side：死神

昨日千夏に明日も来ると言ったんで、

有言実行とばかりに病院に昼過ぎぐらいに千夏の病室に来たんだが

……。

「なんで病室に居ないんだよ」

明らかにトイレに行ったとかそういうのじゃないし、手術のための
体力作りの散歩でも無い。

逃げたのか？

いや、あいつにはいつ死ぬかは言ってない。

それに千夏は俺と会うのを楽しみにしているように見えた。

「めんどくさい事をしてくれたな」

そう言いながら俺は目を閉じ、力を込め見開いた。

俺の固有能力の一つ、リゲ・スカーク過去を垣間見る瞳。

魔力を少し消費するが、そんなこと今は関係ない。

病室をぐるりと視回す。みまわ

……病室から出ている。

俺がここに来てから5分ぐらい、その間に帰ってきてはいない。

そして病室から出た痕跡。

……病院から抜け出しやがったな！

早計かもしれないが、これ以外、俺には考えられない。

俺は瞳を使うのをやめた（瞳は便利だが、使いすぎると気持ち悪くなるんでな）。

そのあと窓枠に足を掛け飛び降りた。

正確には飛んだ。

漆黒の翼を広げ、力強く風を掴み、一気に上昇する。

地上で捜すよりも空から捜した方が見つけやすいだろう。

病気の、しかも入院生活の長い身体じゃ、

そう遠くまで行けないだろう。

さっさと捜し出してやる！

side：死神 Fin

side：千夏

三時ぐらいに病院を抜け出して、病室からいつも見ていた空き地に着いたのが十分前。

千夏の目の前にはすごく綺麗な夕焼け空が広がっている。

病室からじゃなく、病院の外で見る、本当に久しぶりに見る風景。これが見たかった。

しい兄は千夏はもうすぐ死ぬって言ってた。多分それは手術が失敗するからだと思う。

手術までまだ四日あるけど、抜け出せるのは今日ぐらいだし、それなら千夏は怒られても病室のお外で大好きな風景が見たかった。

しい兄、怒ってるだろうなあ、先生も、お父さんもお母さんも。

でも、後悔なんてしない。する気もないから。

！ 後ろの方から足音がする、しい兄かな？

「しい兄？」

振りかえりながら言った、その先にいたのは、

「お嬢ちゃん、一人かい？」

知らないおじさんだった。

side:千夏 Fin

決断すれば・・・(後書き)

予想外です。

出来ちゃうなんて…

閑話〱独白の末に〱（前書き）

ちよつと15禁（個人的に）です。
回覧注意。

閑話〱独白の末に〱

物語は少し遡る。

Side:??

「くそが……何でオレがこんな目に……!!」

誰かに聴かせるわけでもなく俺、水屋寿みすやことぶきは言った。

会社の経理が火の車なのは分かっている。

だが、創設時からの社員であるオレを、こんな山奥の出来たばかりの町に送らなくてもいいんじゃないか!

あのバカな人事部の野郎共め……絶対に許さん!

などと考えながら夕焼け空の下を勤め先から妻の居る自宅へと帰る道のり、

いったいあと何回繰り返せばいいのだろう。

もううんざりだ、左遷させん同然の扱いでココに移され、自宅で待っている嫁は多額の保険をオレに掛けている……。

もうどうにでもなればいい、最後にパツといい思いをして死んでやる。

そうだな、誰でもいいから女子おんなを犯してやる。

ちょうど近くに空き地がある、子供の一人ぐらいいるだろう、それでいい。

よし、ちょうど少女が一人いた。

いや待て、念には念を入れるべきだ。
オレは少女の背後から近寄った。

「しい兄？」

少女は振り返った、かなり可愛い、上物だ。

「お嬢ちゃん、一人かい？」

優しく話しかけた。今すぐにも押し倒してぐちゃぐちゃにしたいが、
道路が近いからいくら人通りが少ないとはいえ、ばれるとまずい。

近くの林の中まで連れ込んでからだ。

まあ、ごねるようならなれば力づくで連れて行けばいい。

「うん、千夏は一人だよ。」

素直な子だ、さらさら都合がいいな。

「じゃあ、おじさんと遊んでくれるかい？」

性的な意味で………な！！

「でも、もう病院お家に帰らないといけないから………」

「大丈夫、ちょっとだけだから」

微笑ほほえみの中に欲望を隠しながらオレは言った。

少女は、 千夏とかいったてな は少し考え言った

「ちよっとだけなら」

ちよろいもんだ、子供なんて優しくすれば簡単についてくる。

「じゃあ、あっちの林の方に行こうか？」

「え、林の方に行くの？」

少し躊躇しているようだ。

「ほら、早く」

軽く急かす。

「うん」

オレの後ろをついてくる少女。

さあ、これから欲望の発散の始まりだ。

心の中で舌なめずりをしながらオレはほくそ笑んだ。

side:水屋寿 Fin

閑話〱独白の末に〱（後書き）

……正直すいませんでした。

こいつのセリフを考えている時、すごい悶絶していました。

捜し人は何処に？（前書き）

何処、と書いて「いずこ」です。
間違えの無いように。

捜し人は何処に？

side：死神

太陽が完全に沈みつつある中、俺はまだ千夏を捜していた。

空から地上を見てしているが見つからない。

「林の中にも入っているのか？

それにしても痕跡が残っていないし……」

病院を出てから何度か瞳を使ったが、

千夏らしき少女が歩いていた痕跡は見つけられなかった。

くそ、手掛かりが無さ過ぎる、

俺が持っている千夏の情報是指令帳のと昨日の会話から得たモノだけだ。

新しい方を優先するとして……。

思い出せ、昨日の会話内容を！

「確か……食べ物好き嫌い、動物、色、風景、誕生日」

ん？

まで、何か引つかかった。

「風景……夕焼け空！」

思い出したぞ、『風景』の後に千夏が言った言葉を。

『しい兄、見てよ。』

あそこの空き地からならささえぎる物無しで夕日が見えるよね。』

「ちい、時間を無駄に使っちゃまった」

俺は今病院から結構離れた場所にいた。

千夏がみつからないのでいつの間にやら探索の範囲を広げていたらしい。

だが、場所が分かればあとはそこに行くだけだ。

俺はたまっていた苛立ちを晴らすように翼を力強く羽ばたき、宙返りから速度を上げた。

千夏を見つけたあとの事を考えないようにするために。

太陽はすでに沈み残光をほのかに残すだけになっていた。

side:死神 Fin

捜し人は何処に？（後書き）

やっと起承転結の承が終わりました。

前半の更新遅すぎましたね…

これからも2日に1回の更新でいきたいと思います。

諦めること無かれ(前書き)

後書きが寂しい気がするので少し変えてみます。

諦めること無かれ

side：死神

俺が空き地に着陸した時、すでに日は暮れ、夕闇が辺りを包み隠していた。

もつとも、死神である俺には昼間と同じ感覚ではっきりと見えるが。

辺りを見渡すが千夏の姿は見えない。

だが心当たりは此処こゝしかなかった。

そして、時間も迫せまっていた。

俺が死神をしている理由。

新たな能力ちからを手に入れること、条件としてアイツは死神として魂を半年間狩り続けると言った。

当然、失敗は許されない。

これまでしてきた事を無駄にしてたまるか。

そんな気持ちが大半だ。

しかし、心のどこかで俺に向けられた無邪気むくで無垢な笑顔を守りたい、

そう思っている俺もいる。

「千夏！何所にいる！」

必死の呼びかけ。

此処で見つけなければ、俺が今日までしてきたことも、千夏が生きて来た事も全てが無かった事になってしまう。

「…い兄…助、グ……」
「静かにしろ」

！林の方からだ。

千夏の声の後に聞こえた野郎の声、どこかで聞いたような気がするなどという考えを頭の片隅に押し込め、俺は走った。
千夏のもとに。

s i d e : 死神 F i n

s i d e : 千夏

「静かにしろ」

千夏の首を締めながらおじさんが言うてる。

「グ……力……」

息づるし、意識が……遠のきソウ。

しい……nii……助けて……

「どけ」

おじサン、の後ro……カラ……こエが、して、

オジサン……、ガ振り向ク……、指……のチkアラが……y……ul
まった。

瞬間。

「ごがああああああああああああああああああ」

おじさんは千夏の視界からきえた。

そして、おじさんの後ろに立っていたのは

「捜したぞ？千夏」

しい兄だった。

side:千夏 Fin

諦めること無かれ（後書き）

死「ついに転だな」

長かった、とてつもなく長かった気がする。

「おもに最初の月一更新のせいだけだな」

あんどきゃあ、そこまで急がなくてもよかったからな。

まあ、次回のタイトルコールよろしく!!

「わかった。

次回、心の支えと…」

では、出来れば二日後会いましょう。

心の支えと・・・

side：死神

千夏が危険な状態にあると感じた俺は林の方へ走った。

(やっと見つけた、てっとうという状況だ!?)

ようやく千夏を見つけたと思ったら、

見知らぬ男に押し倒され首を絞められていた。

見た瞬間頭に血が上った。

つまりキレた。

「どけ」

男を裏拳で殴り飛ばした。

死神の筋力は個人差はあるが、多くは人のそれを凌駕する。

本気を出せば少し掴むだけでも骨を折る程の力を出せるがやめておいた。

今すぐにもさっきの男を狩ってやりたいが、それは後回しだ。

まずは

「捜したぞ？千夏」

千夏への気遣いからだ。

知らない男に押し倒され、そのうえ首を絞められていたんだ。
精神的苦痛に元々からある病気による痛み、
普通の子供なら廃人になってもおかしくない。

「うほ……」

しい兄…ぐす、怖かったよお〜」

そつとうな恐怖を受けたのか、
涙を浮かべ少し乱れた服を直すのも忘れ俺に抱きついてきた。

「よしよし、怖かったよな……」

頭を撫でながら言った。

「もう大丈夫だぞ」

優しい言葉を掛けてやる。当然さっきの男と違い、下心なんて微塵もない。

だが、ようやく理解出来た。

千夏の死因が書かれていなかった理由を……。

それは千夏ではなく、俺の行動によって、千夏は生きもし死にもするということだ。

あらゆる意味で特殊例だ。

世界はいく百千にも分岐する、これも一つの可能性の世界か。

つて感傷に浸るのは後だ。

「千夏、目を閉じて耳を塞げ、俺が良しと言つまでそうしているん

だ

「え、なんで？」

「いいから」

少し強めの口調で言う。

「……うん」

千夏は少々釈然しゃくぜんとしないようだが従った。

ホント根は素直だな、俺の言う事をちゃんと聞いてるし。

などと思いつながら俺はベルトに付けているホルスターから右手でナイフを抜き、

千夏の前の地面に刺した。

「フォレスト・ピース
空間隔離」

よし、これでどんな事があるかと俺が解除するまで千夏は隔離された。

ようやく生ごみを処理できる。

side:死神 Fin

心の支えと・・・（後書き）

今回出て来た呪文は次の登場人物紹介的なもので説明します。

死「逃げたな」

逃げだよ、少し精神状態が悪くなってきてんだよ！！

死「あゝ、こりゃだめだ。

次回、夢か現実か。

お楽しみ」

夢か現実か（前書き）

宣言通りただいま投稿！！

夢か現実か

side：死神

俺はさっき殴り飛ばした男に近づいていく。

あいつは『失敗はするな』とは言ったが、
『違う奴を狩るな』とは言っていなかった。

俺の今月中に狩らなければいけない人数は14人、
1人ぐらい違う奴が混じっていても問題は無いはずだ。

そう自分を納得させている最中に懐に入れてあった指令帳が独りで
に俺の顔の前に浮き開いた。

(新しい頁?^{ページ})

そこに書かれていたのは、俺が殴り飛ばした男の様だ。

「水屋……寿？」

どっかで聞いたような……

まあいいか、そのうち思い出すだろう」

そう独り言を言って俺は背負っている死神の鎌シュバル・レッダを抜いた。
もともと俺が持っていた大剣クレイモアを改造し形をそのままに鎌の能力を付
加してもらった特注品だ。

「さてと、生水屋ゴミを狩るか」

「ひっ！」

どうやら意識を取り戻したようだな、好都合だ。

「普通なら遺言とかを聞くんだが、それもめんどくせえ。
さっさと死ね」

大剣を振りかぶり、振り下ろ

「ま、まで。」

せなかつた。

なんだ？

何が言いたい、後10秒だけ待ってやる。

「お前、ふじなみ藤波、ふじなみせいじ藤波成司だろ！」

side：死神 Fin

夢か現実か（後書き）

死「なんで、今の名前じゃなくて前の名前の方が先にでんだよ」

なぜかこうなった…

プロトと違う方向へと自己進化したぞこの作品…

「それは…すごいのか？」

多分…

「はぁ、そうしといてやる。

次回、藤波成司

お楽しみに」

藤波成司

side:死神

藤波成司、それは俺が人間だったころの名前だ、それを知っているのは友人と級友ぐらいのはずだ。

「水屋……寿……」

ああ思い出した、あの水屋か」

「そ、そうだ。」

隣のクラスだった水屋だ」

そういえば居たな、そんな奴。

「どうして俺だと分かった」

「……お前の独特の雰囲気だ」

独特、ねえ。

結構地味だったはずだがな

「だが、お前は15年前トラックの事故で死んだはずだ！」

そうか、もう15年も前か……

俺が死んだのが16歳だったから、

つまりこいつは今は31歳か。

おっさんだな。

しかし、俺が死んだのは事実だがまさかトラック事故で死んだ事になつてるとはな…
隠蔽いんぺい工作雑ざつだなアイツ。

「くくく、確かに俺は死んだな「じゃあなんで俺の前に居る！」

人が話してる途中で割り込んでくんじゃねえよ。

「ふん、藤波成司としては死んだ、ただそれだけだ。
今はしがない死神、過去なんて捨てたも同然だ」

面食らった顔をしているな、まあ、当然か。

例え元知人（友人でもなきや親しくもなかった）だろうと容赦はしない。

俺の前に居るのは唯の獲物であり、俺の未来のための礎いしすえで、
唯の意志のある肉塊にすぎない。

「さてと、お前は俺の話す事があるようだが、俺は手前と話す事は
何もねえんだよ、

さっさと狩らせろ」

無機質で冷たい声で言った。

ここまで冷たい声を人は出せるもんなんだな。

「な!？」

ま、待て、級友だろ？

こ、ここは慈悲を、慈悲をくれよ、な?」

「嫌だね、ちようどイライラし始めてんだ。」

這つて後ろへ逃走しようとする水屋。

俺は劍の腹で水屋を殴打した、もちろん死なない程度にだ。

「じあ！」

再び吹き飛び木へと激突した。

「た、助けてくれ、頼むよ。

なあ、お願いだ。

なんでもする、だからああああああ

涙をため懇願する水屋。

ここまで醜いものなのか、生に執着する人間てのは！

「手前はその口で、その体で千夏に何をしようとした！」

劍が水屋の体を切り裂いたように見えた、

死神の鎌が断ち切るのは普通は肉体と魂を繋ぐ糸だけだ、
体に傷はつかない。

「お、お、お、お、お、お、お、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、」

水屋の身体から黒い無数の顔があるように見える塊が叫び声を上げながら飛びだしてきた。

そういえば、俺達死神は自分の力加減で魂に激痛を与え昇天させることも、

優しく昇天させることも出来たんだっとな。

にしても、死んでもうるさいやつだ。

「汚い魂だ、欲望の塊だな」

つい客観的に言ってしまう。

「許さなない、呪ってやる！」

絶対たああアアアア！！！！！！」

「さつさと消える、お前の汚いくぐもった声なんざ聞きたくもない」

そう言つて俺は水屋の魂にもう一度斬撃を叩き込んだ。
音もなく消えていく奴の魂

「せいぜい苦しめ、天上でな」

振り向き剣を二三回振り背負う。

さて、千夏の元に戻るか。

side:死神 Fin

藤波成司（後書き）

しゃああああああああああ！！

死「シャウトすんな」

嫌いなキャラナンバーズリーに入る奴が居なくなったらそりゃ嬉し
いだろうが！

「かも知れんが……」

あ、もしかして同情したのか？

「誰がするか！

あんな奴に」

そう、それでこそ俺の理想像だ。
冷酷であってくれよ、
主人公。

「知るか。

しかしこれで起承転結の転の山は登ったのか？」

いや、次が一番大きな山だ。

「マジかよ……」

それと、俺の小説はこれから序起承転結末を目指すぞ。

「序と未って何だよ？」

序はプロローグ、未はエピソードと後日談ってところか

「冒険するなあ」

人生は常に冒険だ。

「あ、そ。そりゃあ良かったな。」

次回、超越した死
お楽しみに」

超越した死（前書き）

これからは火と木を除く偶数日に原則更新します。

超越した死

side：死神

千夏の前に刺してあったナイフの柄を握り

「ウヌクス
解除」

解除の呪文を唱えて抜き、ホルスターに収める。

「もういいぞ、千夏」

千夏の頭を優しく撫でながら言った

「……………うん」

耳から手を離し、目を開く。

「？さっきのおじさんは？」

「死んだ、いや……………狩り獲った」

簡潔に言った。

「そう……………しい兄！」

何か聞きたそうな声色だ。

「何だ？」

「千夏も……今日狩るの？」

やはりそこが気になる……か。

「なぜ今日狩ると思うんだ？」

疑問を疑問で返してやった。

「しい兄が……すごく急いでたし、

本当ならさっきのおじさんに、殺されるはずだったんでしょ？」

鋭いな、恐らく違う可能性の今日ではそうなるはずだったんろうな。

「お前はどうぞさりたい」

「どついう、意味？」

「俺が『お前を狩る』と言ったらどつするつもりだ？」

「千夏は……逃げる、かな」

俺は大剣を抜き千夏の鼻先に当てる。

「俺から、逃げれると思うか？」

真剣な口調だ、冗談の成分なんて無い。

「逃げ切れるよ、絶対に！」

「なぜそう言い切れる」

「しい兄は、千夏を助けてくれたから。
優しいしい兄は千夏を狩れない」

断言しやがった、面白い子供だよまったく。

「じゃあ祈りな。」

俺がどういう行動を取るかをな！」

俺は大剣を振り上げ

「!？」

地面に突き刺した。

「悪かったな、ちょっととした意地悪だ。」

笑って言った。

自分で助けた命を簡単に狩ってたまるか。

「しい兄、心臓に悪いからやめてよ」

地面に両手を付け少し涙目で千夏は言った。

「俺はお前の代わりにあのおっさんを狩った。

それで俺はお前を狩る意味も理由もなくなったのだ。

お前は死を超越したんだ」

「……え？」

「簡単に言えばお前は死なないって意味だ」

千夏の顔がパー明るくなった。

「本当!？」

「ああ、本当だ。

俺は嘘はつかないんだろう?」

「……しい兄って意外と根に持つんだね……」

「よく言われるな」

「ふふ」

「ははは」

いつの間にか俺達の顔には笑みが浮かんでいた、心からの笑みが。

side: 死神 Fin

超越した死（後書き）

死「なんで更新日にちを変えた？」

火、木に塾があつて更新が困難だからだ。

「最初からそう言つとけよ・・・」

いけると思つてたんだよ・・・

「予定は未定か」

まさにそれだ。

本当ならもう少し行く予定だったんだが時間の都合で更新不可になつてしまった。

「友人に嘘言つちまつたな」

クソおお、今度の土曜日に二話ぐらい上げてやる！！

「まあ、頑張れ。」

俺は見といてやるから

次回、はじめては...

お楽しみに「」

はじめては・・・(前書き)

一度消してしまった…

はじめては・・・

side：死神

「さて、さすがに病院に戻らないとまずいだろ。

先生やお前の両親も心配してるだろうからな」

「あ……、忘れてた……」

おいおい、忘れんなよ。

「怒られる……よね？」

「絶対な」

てか、怒らないほうがおかしいだろう。

「俺も一緒に謝ってやるからよ」

「すつつつごく帰りたくないんだけど……」

俺に何とかしてよ的な目線を向ける千夏。

「諦めろ。」

こればかりは俺にもどうにもならん

「……………」

「えっえと帰るぞ」

これ以上遅れたら俺自身もタダじゃすまん」

現在時刻は六時半だ。

辺りを見渡すと完全に闇に包まれほんのりと街灯の光が照らしている。

小学生なら家にいる時間だな。

そんな時間に俺は病人の、ましてや脱走者を病院に連れて行くんだ。大目玉で済めばいいが……。

「帰ろつか、しい兄」

「ああ」

俺は千夏の手を握り林から出た。

「あ、そっかしい兄、

目をつぶって座ってくれる？」

林を出たあたりで千夏が言う。

何でまた、と思ったが口には出さなかった。

いや、出せなかったというほうが正しいだろう。

千夏の言葉一つで俺は本気で警察の世話になる可能性がある……。

少しでも機嫌を取っとかないとな。

「ん……、まあいいけど」

俺は目を閉じ地面に腰を下ろした。

腰を下ろすと言っても片膝を立てた状態だ。

「えへへ、しい兄助けてくれてありがとう」

なんか唇に温かい風、というか吐息がかかったと思ったら。

チュツ

「!？」

俺は思わず目を見開き、器用にも座った状態で摺り足で後退した。今俺の顔を見たらゆでだこの様に真っ赤になっている事だろう。顔が熱い。

「な、ち……千夏。

何をした！」

右手で唇を押さえながら言った。

さっきの行為は明らかに……。

「えへへ、チューだよ、キスって言った方がいいの？」

そんなこと知ってるわ!!

で、俺の問いに答えただけなのに逆ギレしてどうする。

やっべ、混乱してる……。

「ふふふ、千夏の初めてあげちゃった」

そんなうれし恥ずかしい様に言われても……。

時間にして一秒に満たない事、

触れるだけの所謂いわゆるソフトキスだ。

それだけで俺の精神力は半分以上削られた。

俺って自分でも薄々気づいてたけど初心つひだな……。

「何で俺にキスしたんだよ！」

感謝を行為に表したらそうなったのか？
そんなバカな……

「乙女の秘密だよ」

その言葉は二回目だぞ。

「ほら、そんな事より早く病院に戻るつよ」

そういつて千夏は歩き出す。

「お、おい。待てって」

あわてて立ち上がり、千夏を追う。

俺達は光の元に戻っていった。

side：死神 Fin

はじめては・・・（後書き）

死「……………」

……

「どうしてこうなった？」

俺に聞くな、千夏が勝手に動いたんだ。

「プロトと全然違うぞ！！」

勝手に動いたとかそーいう問題じゃねえ！！」

ちくしょおおおお、キャラに嫉妬する俺が嫌だああああ。

「壊れたか……」

壊れてるのは元からだ。

とりあえずコメントして下さったなつほさまどうもありがとうございます。

友人以外でのコメントは二回目なのですがこの感動は当分忘れられません。

「いきなり正気になるなよ……」

まあいいさ。

次回、閑話〱千夏のファースト〱

お楽しみに」

閑話〱千夏のファースト〱(前書き)

宣言通り二話更新です。

俺にはこれが限界です。

閑話〱千夏のファースト〱

side:千夏

えへへ、千夏のファーストキスはしい兄のもの。

さっきのおじさんが迫ってもあげなかった貴重品だよ！

本当はもっとムードと雰囲気をよくしてしい兄が千夏を狩る直前にあげたかったけど……。

千夏は死なないんじゃないよね。

しい兄真っ赤になってたなあ、千夏も真っ赤になってたけどね。

もっと長くしてたかったけど、しい兄逃げちゃったしな。

年上っばいけど初心だね、しい兄って。

いまどき、小学生でもしてるのに。

しい兄には秘密にしたけど、千夏がお誕生日を楽しみにしてる理由。早く大人になって、恋をして、結婚して幸せに生きたいから。

でも、千夏はもう恋を出来たし、今なら本当に悔いなんて無く死ね

るよ。

どうせ結婚するならしい兄としたいけど……、
しい兄は死神さんで千夏は人間。

身分の違いとか、そんな生ぬるい問題じゃないし……、
かなわない恋しちゃったかな？

でもね、例え……かなわない恋だとしても……千夏は……しい兄の事
が好き！！

しい兄は手術の日も来てくれるって言うってたし、
その時言うんだ。

しい兄の事が、大好きだつて！！！！

side:千夏 Fin

閑話〱千夏のファースト〱（後書き）

女の子の心情描写って難しい…

千「が、頑張つてよ！」

これが限界だああ、
女友達も少ないし、そもそも恋愛をした事の無い俺が恋を描くのは
早かつたんだあああああ。

「今日二回目だよね、壊れるの…」

もうほつといて！

癒心旅行に行きたい！！

「ロボコンあるからいけないでしょ？」

ちくしょおおおおおおおおおおお！！

「あちゃー、完全に壊れちゃったよ…

とりあえず次回予告いきまーす。

次回、それでも親は娘を思いやる。

お楽しみに！」

それでも親は娘を思いやる(前書き)

間が空いた事を謝罪します。

それでも親は娘を思いやる

side：死神

千夏を助けキスされてから10分ぐらいが経った、
歩いてる途中で千夏が足が痛いだの言ったので、今はおんぶして
いる。

「しい兄〜まだ〜？」

おんぶしてもらってるのにその言いぐさかよ……。

「あと少しだ」

「それ前にも聞いたよ〜」

じゃあ聞くなよ。

そう思いながら俺は足を止めずに前へと進む。

少しって言うか、もう目の前なんだよな……。

「あ、前見る。

病院の前に着いたぞ」

「あ、ホントだ」

さすがに疲れたな、肉体的ではなく精神的に。

鼻腔をくすぐる千夏の匂い以上に、
林の中で擦れて出来た傷から漂ってくる、甘い血の香り。
正直何度か意識が飛びそうになった。

「千夏、そろそろ降りろ、腕が痛い」

あくまで口実だ、牙が伸びかかっている、
これ以上は俺の自制心が持ちそうにない。

千夏が降りられるように腰を低くする。

「ん、分かった」

名残惜しそうに降りる千夏。

たった十分が長く感じられた、
この吸血欲をどうにかして発散しねえとなあ。

「さて、どうやって病院に入るかって千夏？」

隣にいたはずの千夏が居ない。

どこ行った！

っと思っただら病院の方に走っている。

入院中の病人が走んなよ、
まあ、脱走するだけの元気があれば走れるか……。
というか、走る元気があるなら歩け！！

「千夏ちゃん！何所^{どこ}行つてたの！」

あ、看護師さんに説教食らってる。

「~~~~で~~~~の~~~~」

どうやら事情説明中の様だな。

「~~~~さんが~~~~まで~~~~」

あ、戻ってきた。

「勝手に行くなよ」

「寂しかったの？」

してやったり的な顔で返してくる千夏。

「心配したんだよ」

頭をぐりぐりしながら言う。

「ちよ、しい兄痛いよ」

抗議の声を上げる千夏。

「痛くしてんだ」

「むー、いじわる〜」

千夏の話によると看護師さんに話を通し、両親を呼び出してもらっている様で俺達は外で待つことになった。
病人を外で待たせるなよ。

あの看護師さん、千夏が重病人つてわかんなかったのか？

「しい兄〜寒い」

今それを言うか、さっきまでは平気そうにしていたのに、まあ確かに此の寒さは病人服一枚しか服を着ていない千夏には厳しいな。

「これでも羽織ってる」

着ていたフードを千夏に被せる。

俺は中に長袖を着ているしこれくらいの寒さ俺には何ともない。

当然だが大剣や皮帯ベルトの拳銃ホルスターに刺してある物は見えない様に呪文をかけてある。

変に怪しまれるのは御免だ。

「暖かい……、ありがとう」

やはり俺の服はでかいのかフードの裾は地面に着いてしまっている。

千夏テンシヨウの気分がかなり低い、そんなに会うのが嫌かよ……。

それにしても何やら俺の見える範囲で看護師さん達がヒソヒソと内

緒話をしている、俺の設定は千夏が言うには「風来坊」らしいな……、怪しいよな、うん。
等と考えていたら。

「千夏（ちゃん）！」

病院の中から見た目30代後半ぐらいの所謂ダンディーな男性と同じく30代前半ぐらいのやり手のキャリアウーマン風な女性が走ってきた。

名前を呼んでいたし、千夏の両親だな。

「千夏！今までどこに行っていた！」

千夏の父親が、ええい面倒くさい、篝火父が言った。
俺をガン無視で、まあいいけど。

「あそこに見える空き地に行っていました」

明らかに小さい声で言う千夏。

「何をしに行っていたの？」

今度は篝火母が聞く。

「手術の前に病院の中からじゃなくて外で夕焼け空が見たかったから」

「お前の事を……どれだけの人が心配したのか分かっているのか！」

俺は何も言わず見ている。何か言った所でこればかりは家族の問

題だ。

俺が口出しすべきじゃない。

「……ごめんなさい」

「本当に……どれだけ心配したか……」

篝火母が千夏を抱きしめる、頬を涙がつたい落ちる。

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい、お母さん。」

千夏は涙を流し泣いていた。

side : 死神 Fin

それでも親は娘を思いやる（後書き）

死「いい話だな」

いやまったく。

「毎回こんな話かけよ」

不可だな、俺はこんな話しも好きだがギャグやシリアスの方が好きだ、

あとバトルも書きたい。

「欲張り過ぎだ」

欲望は生きるためのエナジイイイ！

「知るか。」

次回、協力者」

協力者（前書き）

二話投稿！

協力者

Side:死神

「君が千夏を助けてくれたという話は聞いたぞ。千夏に言わせると『協力してくれた』そうだが」

和やかな親子愛を眺めていた俺に声をかける篝火父。

「なぜあんな子どもに協力したくれたんだい？」

普通の親なら気になるよな。子供とはいえ女の子、こっちに下心があるのか聞くだろうし、なにか手を出したんじゃないかと疑うのも当たり前だ。

「いえ、あの空き地を通りかかりましたら声が出たので中に入ったんです。

一悶着あつた後少し話をしましたら意気投合したので協力した。それだけですよ」

千夏と決めた設定で口裏をあわせる。本当のことは言えない。俺の正体についてはどう考えても信じてもらえとは思えないし、変質者に殺されかけたというだけでも、両親には衝撃が大きすぎるだろう。

そのあたりはぼかして、それらしい話を作る。

千夏は病院を抜け出して、自力で空地まで自力で行ったが、そこで

中年のおっさんに絡まれてしまった。

困り果てていたところに偶然俺が通りかかり、おっさんを追い払い事情を聞いた。

それで、俺は暇だったから千夏と世間話などをしながら時間をつぶし、

一緒に夕焼け空を見ていたらいつの間にか千夏が寝ていたの、しばらく寝かせておき、目を覚ましたのがつい20分ほど前。それから急いでここまで来た。

俺はずっと一緒に居たので毒を食うなら皿までの勢いでここまで来た、と言う事にしてある。

「ふむ、それならよかった」

「よかった、とは？」

「いや、君がもしも千夏に手を出していたら、警察に通報する事も考えていたものでね」

「は、ハハハ……」

乾いた笑いしか出ねえ。

むしろ手を出されました！とは言わないでおこう……。

「おっと、自己紹介が遅れたね、千夏の父の炎焰だ。

そして、あそこで千夏と話をしているのが妻の夏帆だ。

君の名前もつかげないかな？」

さてどうするか……、
藤波成司は名乗りたくないし……、
癩しかくだがしょうが無い。

「千夏にはしい兄と呼ばれていますから『シイ』と呼んでください」

「そうかね、ではシイ君。」

改めて礼を言おう、千夏を助けてくれてありがとう」

篝火父　　炎焰さんは頭を下げた。

「わたしは恩は決して忘れない、今後何か困った事があれば遠慮なく頼ってくれ、

わたしに出来る事ならば力になろう」

「あの……失礼ですが、何をなさっておいでで？」

「わたしはこの街の開発担当者で、町長となる者だが？」

……すげえお偉いさんじゃないか。

コネとパイプがいつぺんに手に入ったな。

「はい、では何かあれば御厚意に甘えさせていただきます」

「うむ、そうしてくれ。」

そう言って手を差し出す炎焰さん。

俺は無言で手を出し力強く握手をした。

side:死神　Fin

協力者（後書き）

死「変なところで切るな」

何となくな、此処で切りたくなつた。

「気まぐれかよ…」

最近なこのスペースが、
落ち無し・意味無し・山無しに思えてきたんだ…

「いまごろだな。」

次回、居るべき場所に
お楽しみに「

居るべき場所に

side：死神

それから少しばかり立ち話をした。
千夏としたような自己紹介を少し詳しくしたような内容だ。

炎焰さんが振ってくる話は、千夏に対するモノが多く、かなり偏ってた気がするが……。

途中で千夏を病院内健康精密診断メデイカルチェックに連れて行ってた夏帆さんも交じって焚きつけてたし。

「それでは俺は御暇おひとまさせてもらいます」

現在時刻八時ちょうど、定時連絡の時間を一時間経過している。

「今日は……家に泊うちまらないかい？」

君とはもつと話がしたい、酒でも飲みながら」

「すみません、未成年なんで御遠慮します、それに待っている人もいますので」

酒には魅かれるが遠慮する。

だが、さすがに二日も定時連絡なしで帰ってくるのも遅れてるんだ、
アイツ絶対怒コロクってるって……。

「そうかね、それはとても残念だ」

「ええまったくね」

炎焰さんと夏帆さんの両名共残念がる、どんだけ気に居られたんだ……。
だが二人の眼光が一瞬鋭くなったのを俺は見逃さなかった。
怖え、マジで怖え。

「明日、とは言えませんがまた会いにきますよ」

多分次に会うのは千夏の寿命が尽きる時だろう。

「そうかい、じゃあよかつたらこれを持って行きたまえ」

名刺を差し出す炎焰さん。

「ありがたく頂戴します」

受け取り胸の衣囊に入れる。

「では、千夏には宜しく言うておいてください。

あ、千夏が着ていたフードは差し上げますので自由にお使いください。」

そう言うと俺は病院に背を向けて歩き出す。

俺の居るべき闇の世界に帰るために。

side：死神 Fin

居るべき場所に（後書き）

この後書きを書くのがつらくなってきた。

コ「じゃあ、元の戻したらいいです」

それはそれで色が無いだろうが!!

「そんなの知らないですよ」

そうか…今回は俺がやるか。

次回、帰還後のそれは…

お楽しみに

帰還後のそれは…（前書き）

今回はかなり短いです

帰還後のそれは…

side：死神

で、空間転移の呪文を使って本部に帰ってきたわけだが、予想通り俺はココロの前に正座させられ説教を受けている。予想通りにも程があるだろ……。

まあ、非は完全にこっちにあるよな。

二人一組で行動が原則なところをほぼ丸二日単独行動し、何も連絡しなかったからなあ。

しかし、正座するのはいい、慣れてるし俺が悪いんだから。

だが、場所が悪い、

本部のそれも広間だ。

周りの視線がすごく痛い……。

……見てないで助けてくれよ。

恐らくあと一時間は続くであろう説教を右から左へ聞き流しながら俺は名差しの仕事バトルリが来る事を願いつつ、先輩であり配偶者のココロの説教を受けるだった。

side：死神 Fin

side：-

その後三時間程ココロから説教を受ける彼の姿が見られ、
最終的にはいたまねなくなった周りの死神達の進言により、ようや
く説教は終わったという。

s i d e : - F i n

帰還後のそれは…（後書き）

配偶者⇨パートナーです。

勝手に読み方作りました、世界観的に。

此処までが結だな。

死「流石に足が痺れて一分ぐらい動けなかったぞ…」

ざまあ W W W W

「お前も経験したことあるだろいが!!」

昔の事なんざ忘れちまったぜ。

「千夏並みに都合のいい頭だな、切り開いて洗ってやるっか?」

謹んで遠慮する。

「ハッ、きりきり続きを書いてりゃいいんだよ。

次回、登場人物紹介的なもの、その三。

…またキャラ崩壊か…」

登場人物紹介的なもの、その三（前書き）

今回も作者は暴走しています、生温かい目で見てください。

登場人物紹介的なもの、その三

時「千夏生存!!」

死「最初っからその予定だろうが……」

コ「むしろ狩られた方が私的には嬉しいんですが……」

千「あ、ココ姉ひどい!そんなんだから(しい兄に)振り向いても
られないんだよ」

コ「な、あなただっただけでまだ何にもしてないじゃないですか!

それに今作かぎり登場のはずです」

時「ところがドッコイ問屋が許さないんだよな。

千夏は俺の登場人物的には一番の出世頭でな」

コ「何ですとおお」

時「最初は一発キャラだったんだが、書いてたら生存するは他作品
にも出る予定になるはで結構なキーキャラクターだぞ。

図解にするとこうなる。」

千夏の設定

治らない病で薄幸の一発キャラ 治らない病だったけど治って第二
の人生を歩みだす少女 小悪魔系の死ぬ予定で死神に恋をした少女
小悪魔系の死ぬ予定だったが生きて死神に恋をした飾らない社長
令嬢。

死「マジで……何があった？」

時「いつの間にかこうなった」

千「ふふ、それに、千夏はしい兄とキス「わーわーわー」しい兄、邪魔しないでよ」

コ「キス？そのあとの文面は？」

死「え……あの……そのお……」

時「修羅場が発生したか……、まあいい。

今回紹介するのは三人＋死神君の改訂版プロフィールだ。
行くぜ！！」

死「ちよ、助けてくれよ！！」

コ「この子と一体何したんですか！！！」

・名前……水屋みずや 寿ことぶき

・歳……31歳

・誕生日……四月九日

・性別……男

- ・役割……捨てキャラ、小物
- ・所属……他県に本社がある中企業
- ・身長……171.3cm
- ・性格……ねちっこいこくゲスでエロイ。
- ・一人称……俺
- ・髪の色……茶混じった黒
- ・髪型……ソフトリーゼント風
- ・目の色……黒
- ・装備……よれよれのスーツ一式
- ・趣味……剣道
- ・特技……無し
- ・大事……金
- ・苦手……ヒステリーな女
- ・好きな物……女
- ・嫌いな物(者)……イケメン

・モデル…作者のクラスメートのS氏

水屋寿「呼ばれて飛び出てじゃじゃじ」「うるさい！よんでねえよ
！！」

バキッ 死神と時光の拳こぶしが水屋の顔面に入る音

コ「こつち来んなです！」

ドゴツ ココロの鎌が飛んで来た水屋を殴りつける音

水「何す」「喋んな」「ブツ」

ガスッ 時光が水屋の頭を踏みつけた音

グリグリ（ry さらに踏み躪る音

死「何でこいつクッスを呼んだんだ！？」

千夏が怖がってんじゃねえか！」

千「ガクガクブルブル」

ギユッ 千夏が死神のフードの裾を掴む音

時「誰も読んでねえよ。番外編の畏って奴だろ」

千「うゝ寒気がするよ〜」

死「設定とは言えこいつと元同級生つてのが嫌だな……」

時「……俺、こいつのモデルと現在進行形で同級生なんだが……」

死&コ&千「御愁傷様だな（です）（だね）」

ポンツ　　三人の手が時光の肩を叩く音

時「なあ死神。さつさと狩って終わらせようぜ」

死「そうだな、いい加減飽き飽きしてきたところだ」

水「ま、待て最後に一つだけ言わせろ」

時「手短に言え」

水「おう、ハアハアお譲ちゃんたち今何色のパン「狩りつくせええええええええ」「言われなくともおおおお」「最後まで言わせてくれよぎやああああ」

四人「……………」

時「さっきの奴は居なかった事で良いよな？」

三人「うん」

時「よし、気を取り直して千夏の両親の紹介だ」

- ・名前……かがりび ほむら 篝火炎焰
- ・歳 …… 37歳
- ・誕生日… 八月五日
- ・性別… 男
- ・役割… 千夏の父親、星ヶ丘市開発担当者兼町長
- ・所属… 星ヶ丘市開発部署
- ・身長… 182.2cm
- ・性格… 義理がたい、家族思い
- ・一人称… 公は私、私はオレ
- ・髪の色… 黒
- ・髪型… オールバック
- ・目の色… 黒
- ・装備… 綺麗なスーツ一式、家族で撮った写真
- ・趣味… 家族へのプレゼント探し
- ・特技… 格闘技や護衛術全般

- ・大事……家族、社員達
- ・苦手……小悪魔時の千夏
- ・好きな物……モデルガンなどの銃器
- ・嫌いな物……金の亡者
- ・モデル……某蛇のスパイゲームの若かりし頃の主人公
- ・名前……かがりび 篝火夏帆
- ・歳……35歳
- ・誕生日……七月二十日
- ・性別……女
- ・役割……千夏の母親、専業主婦
- ・所属……専業主婦なので篝火家というのが妥当
- ・身長……160.3cm
- ・性格……少し抜けているじまら下 温和
- ・一人称……夏帆さん

・髪の色…明るい茶色

・髪型…腰まであるふわふわのロング

・目の色…黒

・装備…Yシャツ、スカート、プレゼントのロケットペンダント
(家族の写真入り)

・趣味…新しい茶葉を集める事、コスプレ衣装作り(千夏用)

・特技…だいたいのお茶を美味しく淹れる事が出来る

・大事…家族

・苦手…自己中心的な人

・好きな物…御茶菓子

・嫌いな物…お酒(嫌いなわけではなく弱いから)

・モデル…某の憂鬱の未来人の大人バージョン

炎「待ちに待ったよ」

死「なぜ段ボールから……」

炎「モデルつながりではないかな？」

コ「メタ発言ですか？」

時「多分な」

千「軽！それでいいの！？」

夏帆「夏帆さん的にはいいんじゃない？」

千「うわ！？お母さんどこに居たの！」

夏「T.O.O.Dで時間を「ストップ」、それ以上はさすがにアウトです」
今までのあなたの発言の方がアウトじゃないかしら？」

時「それはそれ、これはこれ」

コ「御都合主義にもほどがあります」

時「御都合主義の無い作品は存在しないと自負してるんでな」

死「確かにそうかもしれんな」

千「しい兄が畳化されちゃった！？」

コ「これが番外編のノリ……恐ろしいです」

千「うわあああ、今度はココ姉が90年代の少女漫画みたいに真っ白になって驚いてる！？」

時「なんつーカオス、まだまともなのが三人居るだけましか……」

炎「しい君、千夏を悲しませたら……わかってるだろうね？」

死「わかってます、分かってますからスーツの中に入れてる手を出してください！

少し硝煙の匂いがして嫌ですから！」

夏「ふふふ、あなたはどんな服「コスプレ衣装」が似合うかしら？」

コ「う、何ですか？背筋が寒いです」

千「うわああ、どんどんわかんなくなってきたあああ」

時「……死神君の改訂版を載せて終わらせよつと。

変わったところも変わってない場所も載せます」

・名前……死神、現在の名前は不明。

人間の時、藤波ふじなみ 成司せいじ

・歳……設定年齢17歳

・誕生日……十月四日

・性別……男

・役割……主人公

・所属……ダークル・スライム・カナルピオ魔界の死神組織

- ・身長…… 169,4cm
- ・性格…… 面倒見が良い、仲間思い
- ・一人称…… 俺おれ
- ・髪の色…… 黒
- ・髪型…… 短髪より少し長いぐらい
- ・目の色…… 黒
- ・装備…… 死神のローブ(シユバルアウロ)、鎌の代わりの大剣、種類はクレイモア、アンダークルツレーチェスーツ(下着ではない、シャツみたいなとズボン)、呪文を刻んだナイフ二本(片刃)、特別製の魔銃(リボルバー式とオートマチック式)、二丁と弾が10発ずつ。(常に持っているのはリボルバー式の方)
- ・趣味…… 新しい魔術 & amp ; 技の開発、読書
- ・特技…… 家事全般
- ・使用魔術…… 空間隔離フォレスト・ピース、解除ウヌクス
- ・大事…… 仲間、現在の家族、大剣
- ・苦手…… 報告書作り
- ・好きな物…… 月、林檎

・嫌いな物……仲間をぞんざいに扱う奴

・モデル…作者の理想像

時「死神君はこれからも改訂されていくので、そのたびに掲載していきたいと思います、

　次回の紹介的なものは死神と今作の舞台、使用魔術の説明となる予定です」

千「あ、逃げないでこの状況をどうにかするの手伝ってよ！」

時「三十六計逃げるにしかずだ」

エピソード

Side:千夏

今日は十月十四日、千夏の誕生日で手術の日。

しい兄は千夏は手術じゃ死なないって言ってたけどやっぱり不安。けど、それよりもしい兄は手術の日にも来るって言ってたのにまだ来てくれない！

手術まであと四時間、

手術室に行ったり準備とかにも時間が要るから、
実質あと三時間ぐらいしかない……。。

俺は嘘はつかないって言ったのになあ。

「しい兄……会いたいよお」

何気なく呟く、そしたら。

「呼んだか？」

「しい兄!？」

ベッドの近くにしい兄が現れた、
一体いつから居たんだらう……。。

「久しぶりだな、千夏」

「うん！」

「仕事を抜け出てきたからそこまで長くは居られないからな」

「別にいいよ、千夏はしい兄に会えただけで嬉しいから」

本心からそう言った。

「手術まであと何時間ぐらいだ」

「え〜と、後四時間だけど移動とかいろいろあるから実質三時間ぐらいかな」

「三時間が……じゅうぶぶん充分だな」

「え？何」

千夏が言葉を言うより早くしい兄の人差し指が千夏の額にあたる

「ウインド廻れ」

しい兄が何かを呟いたと思ったら、

千夏の見ている世界が変わった。

千夏は今とっても綺麗なお花畑の中に居る。

(俺からの誕生日祝いだ)

頭の中に直接しい兄の声が聞こえる。

(俺が今まで見てきた世界の一部を三時間で見せられる分だけ見せてやる、感謝しろよ?)

しい兄の音が頭の中で聞こえた、すると千夏の周りの世界が変わる、変わる、変わる。

お花畑が天まで届くような高いお山に、お山が真っ白のお城に、お城が

千夏は現実に戻ってきた。

時計を見ると三時間たってる、ホントにあっという間だった。

「どうだった？」

「世界って……こんなに綺麗なんだね」

自然と感想が言えた。変に飾るわけじゃなくて何も考えず本当にそう思えた。

「そりゃよかった、見せたかいがあるってもんだ」

「ありがとうしい兄、最高のプレゼントだよ」

微笑みながら言う、

しい兄も微笑み言った

「俺はそろそろ戻る。」

誤魔化しが効く内に戻らないといけないんでな、
手術頑張れよ」

ベッドから離れていくしい兄。

あ、まだ言わなきゃいけない事があるんだ。

「しい兄！」

「ん？」

振りかえるしい兄、今だ！

「大好き！！！」

今までで本当に最高の笑顔と一緒に気持ちを伝えた。

「まったくコイツは決心が鈍っちまうじゃねえか……手え出せ千夏」

立ち止まって最初は聞き取れないくらい小さい声でしい兄が言う。

千夏は何のためらいもなく即座に手を出した。

「少しは躊躇ためらえよな……」

と言って千夏の手をにぎった。

「え！？」

それは一瞬だった、でも千夏の手の中にはしい兄のぬくもりが残っている。

「ついでだ、それも貰っとけ」

手の中にあっただのはまるでルビーみたいに真っ赤な石。

「何これ？宝石？」

「そんな大層なもんじゃないさ、守り石だ」

「お守りみたいな物？」

「ん〜、まあそんなもんだ」

少し悩んで答えるしい兄。

「大事にするね、絶対に失くさないよ」

「そうしてくれ、ペンダントにでもしてずっと持ち歩いてる、俺の代わりにお前を守ってくれる」

一拍置いてしい兄は続ける。

「また会おうぜ千夏、今度会ったら本当に最後だ」

しい兄はそういって消えた。

「しい兄……ありがとう」

side:千夏 Fin

side：死神

俺は千夏の病室から出て病院の屋上に来た。

背中に視線を感じながら。

「仕事サボるのも大概にするですよ、しい兄？」

ココロが不意に声を漏らす。

「……ココロ、それはイヤミか？」

「当然です、昨日のお説教だけじゃ足りなかったですか？」

「いや……説教はもう充分だ……」

マジで勘弁してください！！

あんな思いを二日連続でするなんて断じてごめんだ。
今度は助けてもらえないだろうしな……。

「それにしてもえらくあの娘こに御執心ごしゅうしんですね、
本当に下心無いんですか？」

「ふん、そんなもんねえよ。

あいつに似てたんでな」

「あいつ？誰ですか？」

「秘密だ、知りたきゃ俺から聞き出してみな」

はぐらかした、あの二人の世界の事は俺だけが記憶する。
誰かに言うつもりは今の所無い。
もつとも、そのうちの一人にはそのうち会えるだろうがな、
なんたつて俺の中に居るんだから。

「さあて、仕事に戻るか」

「やっとやる気を出したんですか？」

ココロが呆れ気味にやれやれと行為^{ジェスチャー}まで付けて言つ。

「次狩るのつて誰だっけ」

「私に聞くですか……。」

いいですけど、此処から

最後まで聞かずに俺は翼を出しはためかせ飛んだ。

どうせこの街の誰かだろうからな。

「な！聞いて先に行くなです！

待つですよ！」

ココロも急いで飛び上がり抗議の声を上げる。

そう、これが俺にとっての死神の日常だ。

To Be Continued . . .

エピローグ（後書き）

本編終了!!

死「長かったな、主に最初の方が」

そくだなあ、先輩の無茶ぶりが無かったらこの短期間で終わんなかったぞ。

プロト前話の時点で終わってたんだが、
気に気にいらなかったんで急遽伸ばしたんだがなかなかの出来だろ？

「そくだな、俺的には結構綺麗な終わり方してると思うぞ」
そударるそударる。

「ん？まで、本編終了ってことはまだ続くのか？」

ああ、閑話と登場人物紹介的なものが一つずつ入る予定だ。

「またギャグじゃねえだらうな？」

安心しろ次のは真面目のはずだ。

「すっげえ不安だ」

まあ、期待しとけ。

次回、閑話ある会議室の会話
お楽しみに

閑話ゝある会議室の会話ゝ（前書き）

本編には直接は関係は無い予定ですが、
物語的にはかなり確信を突く話です。

批評、感想コメントジャンジャン募集中です。

閑話ある会議室の会話

side :

違う次元、異なる時間。

白と黄で彩られた会議室で男女合わせて十人程度の人々が集まっていた。

いや、人というには明らかに異なる姿や仕種であり、会議室も人の考えるそれとは違っていた。

一つに彼、彼女らの頭の上に色とりどりの天使の輪アングレハルワがある事、

二つに彼らの座っている椅子や前にある机が宙に浮いている事、

何より一番目立つのは彼らの背にいっつい一対から九対きゅうつういの翼がある事である。

それも天使の輪よりも様々な色をしていて大きさ、羽根の質など一つとして同じものが無い。

上げ出したら足りないくらいで一言で言えば複雑怪奇な人々、いや、天使？である。

そんな現在の日本にいればファンタジー映画の撮映かと思われそうな彼らが一つの部屋で会議をしている。

もし人間であつたなら豪華な椅子に座っている青年は二十代前半、他は皆三十代前後に見えた。

「傀儡実験の調子はどうだ」

青年が言うの間髪いれずに他の眼鏡をかけた天使？が答える。

「は。今日まで実験は人間界の民千人に電波を送信し、その電波通りの行動を取るかを計測しておりました」

「して結果は？」

「計測により行動をしなかったのが五四七件、電波の指示とは異なる行動をしたのが二五三件、電波通りの行動を行ったのが一三九件、壊れた発狂したのが三一件、標的とは別の人間が指示した行動をしたのが三十件です」

「ほう、以前に比べればだいぶ大分精度が上がったようだな」

青年が言つとすぐさま反対意見が上がる。

「しかし、催眠状態は心理的に揺さぶりをかけられますと解けております。」

「実用にはまだ早いかと…」

「確かに、神の洗脳シヤエル」

「ハイ」

眼鏡をかけ、計測結果を喋っていた天使？が声を上げた。

「さらに精進し、ヘラクレス・アウノザーツ我らが天界の兵力増強が出来るようにせよ」

「了解しました、神の黄昏ラグナエル様」

「次に」

会議は続いていく。

死神達の知らない間に、さらに世界は捻れ狂い暴走を始める。たった一つの天使たちの世界によって。

s
i
d
e
:

F
i
n

閑話ある会議室の会話（後書き）

謎を残しつつ閑話も終わりました、
今回は普通の後書きです。

話的にはこれでおしまい、次は俺の友人曰く「真骨頂」の登場人物紹介的なもの、その四です。
もっとも、ギャグは無しで真面目にする予定ですけど。

登場人物紹介的なもの、その四（前書き）

目指すはギャグ成分の減少

若干今までの話をつじつま合わせのため改変しました。

登場人物紹介的なもの、その四

時「はい、と言うわけでギャグはなるべく無しで真面目に行きましよう」

死「主にお前が入れてんだろ……」

コ「まったくです」

時「はいはい俺が悪うございました。

今回は星ヶ丘町の簡易的な説明（仮）と死神君が使用した魔術の説明、

あと少しだけ死神全体的な説明を予定しています。

箇条書きになりますますが勘弁してください。

では、スタート！」

名前：夜月市星ヶ丘町

場所：東海の伊勢がある県と盆地ばっかの県の境

イメージ：某禁書目録の学園都市か某の鳴くころにの竜騎士07様が太鼓判を押した作品の嫦娥町

町長：篝火炎焰

新都市開発計画、簡単に言えばニュータウン計画で再開発された村で、結構心霊の溜まり場がある。

現在完成している建物は病院、小中高大の各種学校が二校ずつ、住

宅街、少しだが繁華街や商店街公園などが整備され始めた。
現在町民募集中で張り紙から福引、懸賞までありとあらゆる手を使
って集めているので色々な町民が集まりつつあり、特に家族が多い。
村時代からの住民と新町民の間で若干の溝がある。

時「こんなもんか」

死「穴あきだらけだな」

時「これでもかなり考えたんだぞ？」

コ「へー（棒）」

時「ひでえ…これからも此処が舞台になるから追加で変わったたりす
るから、

死神みたくその都度上げていく予定だ」

死「せいぜいがんばれ」

時「おう、期待せずにいる。

次に魔術の大まかな説明だ」

魔術

魔方阵や呪文、モノなどを媒介にして使用するもの。

属性は全部で炎水氷木土鉄毒風雷光闇海地空天魔陽月星絶無他の2
3種で、

死神君が使用した二つの呪文は他属性。

属性について簡単に説明すれば漢字がその系統を表していて、水氷の上位系統が海、木土鉄毒の上位が地、風雷の上位が空と新話の生まれた順に下がっていき、一番上の属性は「無」である。

他はそれを表す神が居らず、人々が最初から生み出した呪文で凡庸性がある。

詳しくは「魔聖界創世記」がある程度進行しだいでてくるのでこちらを（8/22）

フォレット・ブリーズ 空間隔離

文字通り空間を遮り離す魔法で主に要人防衛などに使用される。主として魔方阵を描き使用するが死神は簡易化しナイフに刻み使用した。

どこかにはこれを攻撃に使用した者がいるとかいないとか…

ウヌクス 解除

魔術と言うよりは合い言葉の意味合いが多い。だいたい宝箱や呪文の解除にはこれが使用される。

死「解除の扱い酷いな」

時「思いつかなかったんだ…しょうが無いだろう…」

その代わりこれからもちよくちよく出てくるぞ」

コ「どんな罪滅ぼしですか…」

時「気にしちゃあ負けなんだよ」

死「自棄やけに入ったか…」

そんなじゃ、少しだが死神全体のネタバレにならない設定を載せて今回は終了としますか

メツチャ箇条書きです、作者に変わり謝罪します」

死神

死神は魔界の魔神の直属機関的なものに属している。

魔界の住人は悪魔、死神、某勇者モノとかの魔王の位置にいる暗黒龍、墮天使、アンデット、ワイトが主で、統治するのは魔神であるレントウ・ファロイスの一族

魔界Ⅱ冥界Ⅱ地獄という解釈。

実際ダンテの神曲みたいなThe地獄みたいば場所もあるし、

日本とか欧州とか米国、アフリカみtain地域もある。

その一番上にいるのが司教とココロの父。

給料は働きによって出る。

男女比は6：4ぐらい、種族は獣人系から龍人、ココロや死神君のように人形ひとがた、その他の亜人種（昆虫や魚の混じった人）がごちゃ混ぜ状態。

一番多いのが獣人系でその次に亜人種、龍人で人。
ココロや死神君は人形と書いたが人形＝魔族だと解釈。
実際元純粹な人間もいるけど一厘以下。

先輩が新しく入ってきた奴と組む二人一組が原則で、まれに一人で行動する奴や、三人、四人で行動する奴もいる。

実力（鎌での戦闘や種族的なスキル、戦闘スタイル）が近いやつが組まされるが多い。

組の決定は多くは最初に張り出しがあり、死神の死亡とかによりもう一度決めるときは張り出しを待つか模擬戦による交渉。

最初に渡されるのはフード、アンダースーツ、鎌で自由に改造可。

アンダースーツの上にYシャツを着るもトレーナーを着るも何を着ようが自由。

鎌も改造自由で農業用の鎌みたいなことから、二刀（鎌）持つ奴、ハルバート、斧、ブーメランやら個々の戦闘スタイルによってさまざまに形を変えられる。

しかし、それでも死神君がもっている剣は死神達の中でも最上級品
死神になった時点で個々にスキルが与えられている、それ＋元々持っているスキル。

だいたいとは与えられているスキル一つ。

死神は元からの奴以外はほとんど死人、ココロは元から死神なので死人ではない。

働く理由は生き返るためやささらに力を、知識が欲しいやら色々。

死「これにて終了です、グダグダではありませんが俺の設定などと同じくこれからも順次更新です。」

では、
また「

登場人物紹介的なもの、その四（後書き）

今度、死神の設定として一話にまとめて掲載したいと思います。

こんな場ですが、世梨様コメントありがとうございます。
これからも精進していきます。

最後に

どうも皆様、時光火流那です。

本作「病室の少女と死を運ぶ少年」は無事完結できました。

恐らくほかの作者様方ならばもっと筋道の立つた感謝文か完結祝礼をお書きになられていると思いますがこれが私の現在の限界です。

今作は終了しましたが死神SSはまだ続きますしこれの本筋である「魔聖界創世記」は放置状態にありますので、まだまだお付き合い願います。

死神君やココロ、読者様に人気の千夏の物語は終わったわけではなくこれからも微妙な恋愛的なものからバトルにと活躍してくれるはずです。

次の更新ですが、当分は「魔聖界創世記」を更新していこうと思っております、

死神シリーズ第三弾はまだ完成していないので完成し次第投稿になります。

何より本作は文法的文章的な違いなどが大量にあると教官に言われておりますのでもしかしたら更新を停止し修正を主な活動になるかもしれません。

最後に御愛読ありがとうございます、これからも厚い御愛顧よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077s/>

病室の少女と死を運ぶ少年

2011年11月16日09時55分発行